方法と實驗的な方法とは非常にかけ離れて見えるが，將來に於ては兩者は一體となつて發達するであらう。割居主義を捨てて他の專門の研究を互に理解し利用してこそ新しい道が拓けてくる。分類學者は他の分科の專門家と積極的に協力し，又世界の學者と手を握り，且つ採集家と密接に連絡して進むべきである。同時に植物の利用に關しても應用分類學（Applied taxonomy）を確立して，應用諸學科との密な連絡が切望される。我々は非常に廣い知識を必要とし，多年に亙つて蒐集された資料を充分に活用し，且つ他學科に於ける最新の研究を實際に取り入れるといふ極めて困難な仕事に直面して居る事を自覺すべきである。

○ウナヅキギボウシ(新變種)について　（前川文夫）

土佐の中央部の山間の地，物部川，吉野川上流，鏡川，船入川等の川沿ひの崖にはトサノギボウシ（*Hosta tosana* F.Maekawa）が群生する。これは仁淀川以西から日向南部へかけて分布するヒウガギボウシ（*H.Kikutii* F.Maekawa）と共に蕾が上つてくる時には苞がたくさん重つたまゝ鳥の嘴のようになつているので著るしい。トサノギボウシでは苞が稍ゝ短かいので，その程度が弱く，又花冠が厚味を増している違いがある。處が土佐の東部の魚梁瀨の谷や阿波の海部川沿ひの崖には花容と葉狀とはトサノギボウシの範圍だが花莖はその根本に近いところから急にカーブしている一群ばかりがある。これは崖にふさはしい形質だが固定していて東京で鉢に栽培してもやはり花莖は急に曲るために鉢の緣に無理にとすりつける位になる。如何にも鴨か何かが首を下げて伸ばした形であつて，著るしいので一變種として記載する。遠く飛んで紀州瀞八丁にもあるのは面白い。材料を提供された保井コノ博士，分布を確められた山脇哲臣氏，京大の標本をみるのを許された小泉源一教授に御禮申上げる。

Hosta tosana F.Maekawa var **caput-avis** F.Maekawa var. nov.—Ex *H. tosana* differt foliis tenuioribus, scapo ex basi abrupte arcuato-dependente, floribus minoribus.——Hab. Sikoku, prov. Tosa, Yanase (planta viva in horto Dr. K.Yasui No. 332-Typus); ibid. (No.330—f. *leucoclada* f.nov.—Flores albi); prov. Awa,ad ripas fluvii Kaibe (T. Yamazaki); mt. Tsurugi (Z.Tashiro in herb. Kyoto Univ.); Hondo prov.Kii, Dorohacchô (G.Koidzumi in herb.Kyoto Univ).

○第七回萬國植物學會議は1950年にストツクホルムで開かれる

第七回萬國植物學會議は1940年にスエーデンのストツクホルムで開催豫定の處，戰爭で中止となつたが，その準備委員會はその儘存續して，1946年10月に會合し改めて，1950年7月に開催することを決めて六ケ國語で書かれたスマートな印刷の趣意書が2月に日本に送られて來た。

それによると會議の議長には Fries 教授は老齢の故で辭退し，ゲテボルク植物園長の Skottsberg 教授がなる。

會議は次の13部會に分れている。（　）内は係の名。1）農學．2）細胞學．3）實驗生態學（Turesson 教授）．4）遺傳學（Müntzing 教授）．5）形態學及解剖學（Fagerlind 博士）．6）菌類學及細菌學．7）古生物學（Florin 教授）．8）植物地理學（Du Rietz 教授）．9）植物病理學．10　生理學（Lundegardh 教授）．11）隱花植物分類學（Nannfeldt 教授）．13）顯花植物分類學（Hultén 教授）．13）命名規約（Hylander 氏）．早く晴れて參加できる日を待ちたいものである。